自立活動グループ③

意図伝達の明確化をめざす指導
～身振りサインを伴った音声言語での伝達行動を育む～

神谷みつ江

1．はじめに

中学部３年生のＹ子は、人とかかわるのが大好きな生徒である。表出言語はあるが、発音が不明瞭なため相手に意図が伝わりにくい状況がある。また、注目を獲得するために人への不適切な行動がみられ、これもＹ子にとっては言葉を補うコミュニケーション手段の一つと考えられる。一方、Ｙ子は動作模倣が得意である。これを活かして言葉に伴う身振りサインの獲得が可能ではないか、それが意図伝達をスムーズにすることにつながるのではないかと考え、週１時限の自立活動の時間において指導を試みることにした。

2．指導にあたって

（１）対象生徒　Ｙ子　：　中学部３年生（14歳）

（２）検査結果　KIDS　総合発達年齢　２：９　（平成15年６月４日）

絵画語い発達検査　語い年齢　４：５　（平成17年５月12日）

ＮＣ－プログラム　言語理解　比較概念・カテゴリー・用途　＋

身体部位（10）・形容詞　－

言語表出　動詞　＋　２語文　－

（３）生徒の様子

・発音はやや不明瞭だが、教師や友だちの言葉をよくまねる
・歌が好きで、歌詞をよく覚え、音程良く大きな声で歌う
・人差指での×（バツ）や股を押さえるトイレの身振りサインを使う
・伝えたいことがある時に教師の腕を強く引いたり、指さしたりする

（４）親の願い　・人とのかかわりを円滑にする

（５）担任の願い　・おだやかで適切な表現の仕方を身につける
・好きなこと、したいこと、してほしいことを言葉で伝える

3．長期目標

「言葉に身振りサインを伴って、より明確に意図を伝える」

4．指導の手だて　及び　内容

・Ｙ子にとって日常的に必要性が高い言葉を選択して、本人が獲得しやすい簡単な身振りサインを付ける
・落ち着いて集中して取り組むことが求められる手先を使う活動（ビーズ通し、はさみで切る、箸でつまむ等）、慎重にそっと取り組む必要のある活動（グラグラゲーム、積み木、お茶の用意等）、一緒に楽しめる活動（絵本読み、パズル等）、身振りサインのカードを使った活動等を通して、言葉に身振りサインを伴って意図を伝えることを積み重ねる
・活動は、いろいろな教材を並べて提示し、その中から本人がしたいものをいくつか選んで取り組むことにする

5．個別の指導の概要　（週１時限　実施）

	指　導　Ⅰ（１学期）	指　　導　　Ⅱ　（２学期）
目標	・「一緒に（～して）」という身振りサインを伴って要求を伝える	・より多くの必要な身振りサインを身に付け、使える場面を増やす
指導方法	・授業の初めと終わりの挨拶の中に「一緒に」の身振りサインを盛り込んで使う ・活動中に手伝って欲しい場面で「一緒に」と身振りサインを伴って要求できるよう、促したり待ったりし、要求があれば応じる	・授業の初めと終わりの挨拶は、教師の見本を減らし一人で行えるようにする ・取り組む活動一つ一つにも「始めます」「終わります」の身振りサインを使い、使用頻度を高める ・身振りサインの絵カードや写真カードを使って、身振りサインそのものを学習するマッチングの課題を活動の中に取り入れることで、獲得しやすくする ・Ｙ子が大好きな絵本読みで、ストーリーに沿っていろいろな身振りサインを取り入れて読むことで、楽しみながら身振りサインの数を増やしていく
評価	・**「一緒に」**という身振りサインは頻繁に使うようになってきた （個別の時間以外でも身振りサインを使っての要求がよくみられる） ・「Ｙ子」と「先生」と**「一緒に」「お勉強」**を**「始めます」「終わります」**という身振りサインを伴った挨拶を、教師をまねて行うようになってきた **〈身振りサインの例〉**	**「お願い」**：活動中に手伝って欲しい場面で身振りサインを付けて「お願い（～して）」と要求する **「始めます」「終わります」「勉強する」**：授業や活動の前後に身振りサイン付きで言うことができる **「トイレ」**： 授業中にトイレに行きたくなった時に自分で身振りサインをしながら「チッチ」「トイレ」と伝える **「聞く」**：個別指導室の外から聞こえる友だちの声に気づくと身振りサインをして、誰の声か教えてくれる **「できた」**：いろいろな活動が上手にできた場面で、教師と共に身振りサインをするようになった **「飲む」**：ティータイムでは、「お茶」と言いながら「飲む」身振りサインをして、カップなどの準備をする **「寝る」「だめ」「食べる」「歌う」「遊ぶ」** **「終わり」「風船」「素敵」「おいしい」**： ３冊の絵本読みの中で、教師と共にストーリーに合わせた身振りサインをしながら楽しんで読む **「一緒に」「花」「ハサミで切る」「行く」**： 運動場に咲いている花を切りにでかける活動では、「Ｙ子」と「先生」と「一緒に」「お花」を「切りに」「行きます」と教師と共に表現できた **「カメラ」「ちょうだい」**： 撮影ごっこの中で身振りサインが上手に使えた **「一緒に」「聞く」「ちょうだい」「遊ぶ」「行く」「起立」「着席」「始めます」「だめ」「終わります」「トイレ」「～する」「勉強する」「お願い」「ハサミで切る」「花」「飲む」「できた」「素敵」「～ない」「寝る」「書く」「食べる」「歌う」「風船」「お茶」「カメラ」「おいしい」** **「結ぶ」**：身振りサインの絵カードを見て、並べた写真カードから同じものを選び取るゲームで、自分で言葉を言いながら身振りサインも付けてほぼ正解する
今後の課題	・日常生活における、本人により必要な身振りサインについて検討する ・身振りサインそのものを学習するゲーム的活動を取り入れる等、学習の内容、手立てを再検討する	・学校生活において他の教師や友だちとも身振りサインを使ったコミュニケーションができるように願って、主なサイン例を掲示して伝える等、工夫する ・友だちの前で発表できるような、身振りサインを使った学習の取り組みについて検討する

6．身振りサインを伴ったコミュニケーションの汎化をめざして

日常生活の中でも身振りサインを使うことで、相手に伝える楽しさを感じ、伝わる喜びを味わって欲しいと願って、指導教師が様々な機会を捉えて身振りサインを伴ったコミュニケーションを心掛けていくことにした。学校生活における様子の例を挙げる。

身振りサイン例	学校生活における様子
「トイレ」	・Ｙ子がトイレを要求した場面では、教師が身振りサインをしながら「トイレにいく？」と確認することを積み重ねていったところ、自分から身振りサインで伝えることが増えてきた
「一緒に」 **「遊ぶ」**	・グループ学習の美術の時間、準備室の鍵がなかなか開けられなくて、そばにいた教師に自分から「一緒に」の身振りサインで手伝って欲しいことを要求できた ・朝、登校してきたＹ子に玄関で「遊ぼう」と要求され、「着替えしたら遊ぼうね」と応えると「一緒に」と身振りサインをしながら言って、教師の手を引いて更衣室へ向かった ・給食後、「遊ぼう」と身振りサインをしながら教師を誘い、教師が「遊びに」「行こう！」と応えると、それをまねて連続した身振りサインを使って言えた ・休み時間に中学部ホールのエアホッケーを指して、「一緒に」「遊ぼう！」と身振りサインをしながら教師を誘うことがよくある ・給食の際、食べるのが滞っているＹ子に「食べたら」「一緒に」「遊ぼう！」と身振りサインだけで伝えると、目を輝かせて食べ始めた ・中学部、高等部対象の生徒会行事「わたしのメッセージ」に参加、壇上で大好きなエアホッケーを披露し、「一緒に」「遊ぼう！」と皆にメッセージを伝えることができた
「書く」	・部室で学部集団学習の一覧表に貼る数字を書きたいと要求。教師が「書く？」と聞くと「書く」と身振りサインをしながら言えた ・グループでの授業が始まる際、授業の内容を黒板に自分が「書く」と要求。教師が書いた文字を意欲的になぞって書く。他の授業でも、この「書く」要求がみられ、身振りサインを伴うことが増えてきた
「ちょうだい」	・遠足の時、教師にカメラを「ちょうだい」と身振りサインを伴って要求し、１枚撮影して満足そうであった ・のどがかわいてお茶が欲しいときに「お茶」「ちょうだい」と教師の顔を見ながら身振りサインを伴って要求できた
「～ない」	・給食で食べるのが滞っている理由を聞くと「嫌い」と言いながら「～ない」という身振りサインをして、食べたくないことを伝えられた ・「トイレ」の身振りサインが不確かな場面で、「トイレか？」と教師が確認すると、「ない」と言って身振りサインでも伝えられた
「結ぶ」	・髪が長く、時々結んだ髪が乱れると「結んで」と要求があり、その際に身振りサインでも伝えられた
「始めます」 **「終わります」** **「起立」「着席」**	・グループ学習や学部集団学習での授業の際、自分から号令係を行うことが多く、これらの身振りサインを使うことが見られる
「お願い（～して）」 **「食べる」**	・給食で、牛乳瓶のふたを「あけて」と言葉で要求する時に、「お願い」と身振りサインをしながら言うことができる ・給食の時、教師に自分の学年のテーブルに座って欲しいと机を指さしながら要求する際に、「一緒に」「食べる」「お願い」と身振りサイン付きで伝えることができる（それを見ていた友だちに「すごーい！」と感心される場面もあり、うれしそうなＹ子であった）

７．保護者・他の教師との連携

保護者とは登下校時の機会を利用して直接話をしている。また、家庭や担任との共通理解を進め、個別の時間以外でも身振りサインが使えるよう願って「自立活動連絡ノート」を作り、学習の様子を伝えるようにしてきた。ノートには保護者から“家では「お願い」「一緒に」「終わり」のサインはよく使っている”“サインを使うのは本人はとても好きなようだ”“サインがよくわかるのか上手にまねている”というコメントがあり、担任から

は“学校生活では、何日か前から「遊ぼう」のサインをしている。今まで、どうすればうまく伝えられるかわからなかった部分を、サインを通して、サインを楽しむことを通して、どう言葉で伝えればいいかも同時に学んでいるようだ”と記される等、連携の手だての一つとなっている。

学部の教師には、学部会においてＹ子の自立活動での身振りサイン指導について伝え、生活場面で身振りサインを活用している様子があれば伝えてもらうとともに、身振りサインでのコミュニケーションの対応をお願いした。

８．まとめ

伝えたいことはいっぱいあるのになかなかわかってもらえないという経験を少なからずしてきたであろうＹ子。相手に聞き返されて再度伝えてもわかってもらえない時に、伝えることをあきらめたりうなだれたりしている姿を見ることもあった。思いをどのように伝えたらよいのか困惑しているようなＹ子に身振りサインの指導を行ってみて、その獲得の早さに驚かされた。指導を振り返って考察した点を以下にまとめた。

（１）身振りサインの獲得の要因

①学習の楽しさ

教師のところへ走ってきて「一緒に」「お勉強！」と身振りサインをしながら誘うなど、自立活動の時間がとても楽しいということが学習効果に大きく影響しているようだ。

②学習の適期

母親によると、小学校の頃に「トイレ」や「お願い」の身振りサインの指導があったが、そのときはあまり身に付かなかったということで、今が本人にとっての学習のタイミングとして適していたのかもしれない。

③わかってもらえる経験の積み重ね

言葉に身振りサインを伴うことで意図伝達がスムーズになるという経験が学習への意欲につながり、自立活動以外の場面でも使用するという拡がりがでてきた。

（２）指導において大切にしたこと

①伝えたいことに寄り添った言葉の選択

日常生活でのＹ子のコミュニケーションの様子を踏まえ、本人にとって必要度の高い言葉を選んで身振りサインを導入することで、使用する機会を多くし、伝わる楽しさの経験が積み重ねられるように配慮した。

②発信を待つ

Ｙ子の思いを先取りせず、発信を待つという姿勢を大事にすることで、Ｙ子の意図表出の場面を多く保障したいと考えた。

（３）Ｙ子の変容

①伝えようとする姿

Ｙ子に相手にどう伝えたらよいかを考える様子が見られるようになり、考えついた言葉や身振りサインを使って気持ちを伝える姿が増えてきた。また、身振りサインを連続して使うことにより、２語文や３語文での表現も少しできてきた。

②言葉の増加

他の教師や友だちとの間では身振りサインを使う場面はまだまだ少ないが、身振りサインの学習で身に付けた言葉を使ってのコミュニケーションが増えてきているようだ。自立活動での指導が、Ｙ子にとってコミュニケーションへの積極性を育む一つのきっかけとなったと考えている。